アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程
― Dance Magazine誌（1950年代～60年代）を中心にして―

片岡　康子
田名部靖子

〈研究目的〉

本研究は，アメリカの舞踊教育が，第二次大戦後，創造的芸術経験としてのCreative Dance, Modern Danceを中核に位置づけていく過程を，Dance Magazine(DM)誌上から明らかにしようとするものである。

更に，先にみた体育専門誌JOHPERでの傾向註(1)と，比較的考察を試みる。

〈研究方法〉

ＤＭ誌1950年１月号～1969年12月号に掲載された舞踊教育関係記事を全て抽出，以下の手順で考察を試みた。

(1)年代順にタイトル一覧作成（記事番号1～242）
(2)各記事を領域別に分類（分類項目は下図参照）
(3)各領域が全体に占める割合を10年毎に数量化
(4)主要記事より，領域別傾向，時代的特徴を考察

〈結果及び考察〉

Ⅰ．記事数の領域別推移

抽出した242件を，50年代と60年代に分け，領域別に数量化した図表Ⅰより，総記事数に対して最も大きい比率を占めていたのは，領域Ⅰ（約3割），対象とする年齢層は『子供』と『大学生』が強調されていたことがわかる。この傾向は，50年代の"Creative Dance for Children", "Child's World", 60年代の"College or Career？"に代表される。

領域Ⅰが主流であることは，JOHPERの傾向―（図表Ⅱ）とも共通し，また，全体的な領域構成も，比較的類似していると言える。

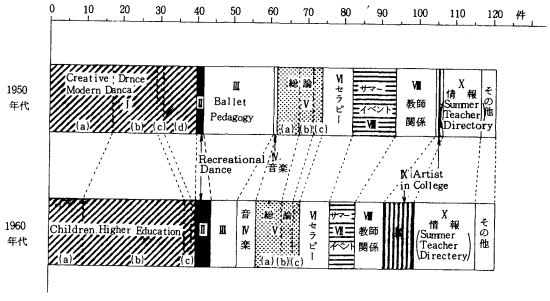
DMの特徴として，"Dance Pedagogy"（ダンス教授法）への注目ということが顕著に読み取れた。各々の年齢・目的に応じ，'Dance Pedagogy' for Children, for Adult, for the Dancer, for Recreation…等に細分化して捉えられている。この中で，特に，DMのみの領域として，Ballet Pedagogy(領域Ⅱ)が分類できた。体育専門誌JOHPERにはみられなかった「バレエ」という形式が，「教授法」と結びついて論じられている。― 主に，芸術的，文化的視点から舞踊に接近する雑誌の，特徴（的な部分）と言えよう。

更に，Summer Event, Artist in College等は，芸術家，教育者，学生，批評家らの交流の報告，「教師関係」は，私営のダンス教師達の組織的活動の報告 ― と，公的な学校制度の普通教育の枠を超えた，広義の舞踊教育が読み取れた。

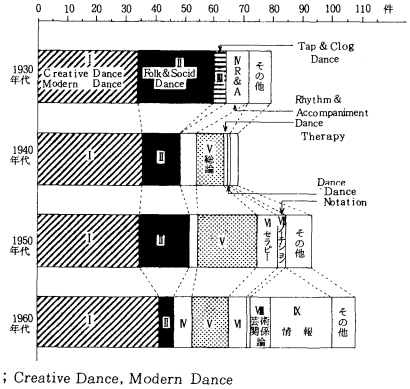
Ⅱ．目　標　論

Ⅰ.で分類した総記事のうち，今回は特に，「子供のためのCreative Dance」に絞り，領域Ⅰ―(a), Ⅳ, Ⅵの記事（指導内容はCreative Dance）から，目標論を検討した。図表Ⅲ―①より，「創造性」「ムーブメント・スキル」「自己表現・自己実現」が強調されていたことがわかり，これはJOHPER誌の目標論の傾向（図表Ⅲ―②）とも共通する。逆に，DMとJOHPERの相違点として，「芸術経験」という目標があげられる。JOHPERでは，「自己表現・自己実現」を上回る数だったのに対し，

〔図表Ⅰ― ＤＭ誌・舞踊教育関係記事 ―〕



〔図表Ⅱ― JOHPER誌・舞踊教育関係記事 ―〕



*(1)中学，高校，大学を全て含めたが，大多数が，大学レベルだった。
(2)フォーク，スクエアー，タップ，ソーシャル，及びモダン，クリエィティヴ，バレエまで形式を問わず，楽しみを目的に，社会教育的な場で指導されるダンス。
(3)演劇・絵画等，他芸術との関わりの中で，ダンス的要素のある教育的企画。
(4)観客育成論。　(5)ダンス教師の組織，会議等関係。
(6)Artist in Residenceなど，大学で教える舞踊家に関する記事。

〔図表Ⅲ　舞踊教育の目標に関する記述の分析 ― DM & JOHPER (1950～1969年)〕

目標		記事番号 ① DM	記事番号 ② JOHPER
精神的(知的・情緒的)	創造性	1, 4, 11, 17, 51, 53, 54, 58, 68, 84, 89, 106, 111, 115, 125, 133, 138, 141, 166, 199, 222, 230, 238	40. 44, 46, 55, 56, 64, 69, 70, 71, 86, 106, 135, 140, 148, 149, 152, 156, 158, 165, 177, 178, 179, 180, 181, 183, 186, 189, 191, 207, 209, 210, 213, 221, 224, 228, 232, 233
	自己表現・自己実現	1, 4, 17, 54, 89, 90, 111, 115, 125, 133, 147, 166, 175, 199, 222, 230, 238	44, 54, 55, 64, 70, 74, 89, 126, 128, 140, 142, 149, 157, 165, 175, 179, 180, 210, 213
	芸術経験	17, 54, 147, 222, 238	44, 69, 70, 77, 106, 121, 128, 129, 135, 140, 148, 157, 165, 176, 178, 179, 180, 181, 183, 189, 209, 213, 228, 231, 233
	生活への貢献	17, 51, 54, 68, 141, 222	44, 54, 70, 74, 142, 170, 180
	楽しみ	1, 17, 51, 58, 90, 138, 141, 147, 153, 175	69, 71, 86, 128, 152, 170
社会的	コミュニケーション	11, 17, 53, 54, 58, 89, 98, 138, 141, 147	108, 121, 129, 142, 152, 156, 158, 170, 175, 180
	文化・社会的理解	11, 17, 52, 54, 84, 89, 147	128, 152, 157, 170, 177, 180, 184
身体的	ムーブメント・スキル	1, 4, 17, 26, 54, 58, 84, 89, 90, 106, 115, 133, 138, 141, 147, 148, 166, 199, 222, 230, 238	40, 46, 55, 64, 69, 71, 74, 86, 108, 121, 128, 129, 135, 140, 142, 149, 157, 158, 165, 170, 175, 179, 180, 182, 228, 231, 233
	身体の発達	4, 54, 58, 119, 128, 158	44, 86, 128, 142, 152, 157
心身の協調		1, 51, 106	128, 142, 152, 157
治療的		44, 52, 73, 81, 99, 103, 140, 178, 179, 180, 202, 220, 233, 239	116, 123, 124, 125, 158, 166, 199, 216, 234

※註；JOHPERの記事番号は1945年－9月号～1969年－12月号；1～234．この表では，1950年－1月号～のみを使用．

DMでは極めて頻度が低く，最も特徴的な項目である。雑誌の性格上，芸術経験という概念は自明の事実として，殊更言及されることが少なかったものと思われる。

概観的には，DM誌とJOHPER誌の，Creative Danceの目標論は，子供に限って言えば，極めて類似した傾向にあったと言える。

Ⅲ. 主要記事概要 ※（　）内は，年－月号

Jack Andersonは，"Children's Dance is 'Serious Fun'"（66－5）で，「『子供のダンス』，『専門家志向のダンス』，『大人のダンス』は，各々異なり，独自の専門的な教授法を要する。こうした考え方が，教師達によって提起されてきており，Virginia Tanner, Ann Halplin等の実践家がいる。」と述べている。Blanche Evanも，「子供を教えることは，大人の教授法とは明確に異なる。」と規定し，"The Child's World－Its Relation to Dance Pedagogy－"（49－1～51－2）を10回に渡って連載，Lucile B. Nathansonは，"Creative Dance for Children"（55－8～55－12）を連載した。その他，TannerやHalprinの実践の紹介，George Balanchine, "Ballet for your Children"（54－6～54－7），Josephine Schwarz, "Primer for Parents"（55－9～56－5）等，子供のバレエの教授法のシリーズと，多様な立場から《Dance Pedagogy for Children》が展開されている。

今回は，これらの記事から，《Creative Dance for Children》の定義・意義と方法論を明らかにする。

① Creative Dance for Childrenの定義と意義

L. B. Nathansonは，「Creative Danceとは－『概念であり，技術ではないから，ダンス形式は問題ではない』，『子供たちに自分の考えや感情を即興的に創作したり，舞踊化する機会を与えること』」，Bruce Kingは，「子供たちが自己の欲求に基づいて踊るダンス」と定義している。そして，子供の発達段階の心理学的，生理・解剖学的特性に応じたCreative Danceの教授は，表現的可能性を伸ばし，身体的解放や芸術経験の場を与える ― という意味があるとしている。

Jack Andersonは，この概念が最近，バレエ教師からの認識も得，私的なバレエスタジオで，子供にCreative Danceを教えているという実践例の報告もしている。Ballet Pedagogyは，バレエと舞踊教育の接点という意味で，DMの特徴と言えよう。

総括的に言うと，DM誌においては，子供のためのCreative Danceとは，Modern Danceのみへと通じるものではなく，Balletへの入口も開いている未分化の舞踊形態とおさえることができ，更に，舞踊教育の側面に視点を置いた舞踊を総称する用語とみることができる。

② Creative Dance for Childrenの方法論

Nathansonは，子供の発達段階に応じて，劇的なダンスから，コミュニケーションの手段へ，更に創造的な計画・実行へと発展させるダンス学習方法を提起し，初歩的段階には「運動の探究」，進んだ段階では，「創作(composition)」を通しての表現を引き出すべきと説いている。[註(2)]（55－8）

B. Kingは，創作過程を重視する，「課題解決法」を提唱し，全ての舞踊教育者が連合し得る共通原理とする。そして，男子をも含む，より多くの子供たちに，創造的芸術経験としてのダンス・プログラムが実現されることを望んでいる。（69－8）

註(1) 片岡康子，田名部靖子「アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程 ― JOHPER誌（第2次大戦後～1960年代）を中心にして ―」，第35回日本体育学会，1984年10月．
(2)，(3) 発表資料3頁参照．